

生徒の心にかかわれる教育実習と生活指導を

元東京都公立中学校教諭 佐藤 博

中学生の生活指導について、話をさせて頂きます。中学の生活指導というのは本当に大変です。授業も大変だけれども、生活指導のほうが時には重いというか大変な仕事のことが多いです。実習生といえども、もちろん無関係ではありません。担任の代わりを3週間しなければならぬからです。私も毎年のように教育実習生を担当していて、最初の1週間ぐらいは教室での指導を後ろで見学させていましたが、後の2週間は実習生に任せていました。自分だけで、朝の会から、給食の指導から、掃除の指導から、帰りの会までやって、最後は部活などもやるでしょう。ですからその時間のほうが、場合によっては授業よりも大変かもしれませんので、皆さんにいくつかアドバイスができればと思って来ました。

授業もただ教科書に書いてあることだけをやったのでは面白くないように、生活指導でも何か自分なりのもの、自分というものをどこかで出して指導してほしいと思います。自分で考えて、何かを学び取れる3週間にしてほしいと思います。

(1) 本との出会いを生かす

◇『はせがわくんきらいや』

本題に入る前にちょっとだけ皆さんにお話ししたいことは、この春は特別な春だということです。私も60年生きてきて、こんなことが起こるとは思いませんでした。言うまでもなく大震災、原発事故です。3月11日以降はそれと無関係に教師の仕事はできないと思

います。私も本当にいろいろなことを考えました。自分は無傷だけど、あんなにたくさんの人々が大変な事態に陥っていて、辛い思いをしている。

不幸というのは不公平です。幸福も不公平です。本当に不公平です。人間の世界というのはそういうものです。皆さんは、自分は被害を受けなかったけれども、何かをしなくてはと思ったと思います。多分日本中の子どもたちもそうでしょう。子どもは何だかんだ言っても、悪そうに見えても、結構純真なのです。何かしなければいけないと思っているはずです。そういう子どもたちに向かって、何を伝えればいいのか。

私が一番考えたのは、直接の手助けができないとしても、何ができるかと考えた時に、それは「何事かを学ぶ」ことではないかということです。私たちが何事かを学ぶことによって、帰らない命は次の世代に生きることになると思います。皆さんも、ちょっとした教材でも、子どもたちに何かを伝えられたらいいと思います。

教育実習では、教科も生活指導もそうだけれども、今まで自分が人生で体験したあらゆるものを総動員して子どもの前に立ち、教育という仕事に向きあってほしいと願います。教師というのは面白いもので、映画を見ても、ドラマを見ても、本を読んでも、あるいは恋愛しても、失恋しても、全てがそれを仕事に活かせる面白い職業です。そういう点で自分の体験を総動員してみてください。何かあった時に、そこから知恵を汲みとってください。

長谷川集平さんという絵本作家を紹介します。森永ヒ素ミルク事件という薬害事件があって、ミルクのなかにヒ素が混じっていて、それを飲んだ赤ちゃんが2万人以上いました。赤ちゃんが125人ぐらい亡くなりました。何千人もの赤ちゃんが障害を抱えてその後の人生を生きることになったという事件があったのです。長谷川さんはその犠牲者の1人です。作品はここに持ってきましたが、『はせがわくんきらいや』という絵本です。この本は、後ろの人は見えないと思いますが、なかを開けるとわけのわからないような字と絵があります。彼は腕がちゃんと動かないからこういう絵になるのです。

NHKのBSで『朗読者の挑戦』という番組がありました。NHKのアナウンサーが小学生の子どもたちに向かって絵本を読み聞かせるんです。中條誠子さんという女性のアナウンサーがこの本を選びました。この本は長谷川さんの友だちの立場で書かれています。長谷川君のお母さんに頼まれて遊んでくれと言われて、いつも一緒にいて遊んであげているけれども、とにかく長谷川君は鼻水垂らして、手足もろくに動かないし、手がかかるし、面倒だし、面白くないし、あんまり感謝もしてくれへんし、面白くない。始めから終わりまで長谷川君嫌いやという、とことんそういう本です。それを心を込めて中條さんが読んだのです。子どもはすごく熱心に聞いていて、最後に伝わっているんです。何が伝わっているのか。それは、嫌いや嫌いやと言いながら、その友だちは長谷川君をすごく大事に思ってくれていた、本当は好きなんだということなんです。聞いている子どもたちには伝わっている。そのことがよくわかる。

皆さんも生活指導で、いろいろな子がいるから、なかには神経を逆なでするような酷いことを言う子もいるかもしれません。だけど、悪態をつかれても、本当は自分を見てほしいと思っているかもしれない。子どもの言葉に

悪意をみてはいけないと思います。私も教師をやっていて、本当にこの子は苦手だなという子がいても、ずいぶん後になって、本当はそんな気持ちではなかったということがよくありました。

◇『あしたは月よう日』

震災が起こってから買ったのですが、長谷川集平さんに『あしたは月よう日』という絵本があります。ちょっと見てください。この本が何を言いたいかわかりますか。

お馬鹿でだめなお父さんが出てきます。「鼻くそほじっとう。もうやめて。またタバコ吸っとう。やめて」。子どもたちは最後までお父ちゃんのことを「やめて」です。ついには、おならまでしてしまうお父ちゃん。「しょうもない父ちゃん。日曜日なのにどこも連れてってくれへん」。そのお父ちゃんが泣いている。するとお母さんが、「あんたらが悪口ばかり言うからやないの」と口を出します。でもお父ちゃんはどうして泣いてるかという、テレビで歌を聴いて泣いていた。「それはどこか知らない国の女のひとと子どもたちの歌で、天使のように透き通るきれいな歌声だった」。それを見て泣いていた。家族はその歌を一緒に聴く。聴きながら家族が皆で空に舞い上がる絵が描かれています。そして一番最後は、「夕方、駅前にラーメン食べに行った。お父ちゃん推薦の店や。めっちゃおいしかった。あしたは月よう日」。それだけの絵本です。この絵本を見て何が描かれているかわかりますか。わからないでしょう。わからないから考える。答えは最初に言うてはいけないのです。

この本にはこういう前書きがあります。

「1995年1月17日、休日明けの火曜日の朝、淡路・阪神を中心に大きな地震がありました。大変な被害があり、多くの人が亡くなり、傷つきました。この絵本は、その朝まで、おだやかなふつうの生活を送っていた方々にささげたいと思います。ありきたりの休日が、

どんなに大切なものだったかわたしたちは思い出出すことができます。」

突然、この絵本の意味が胸に迫ります。これは阪神大震災の前日のお話だったのです。家族が歌を聴きながら空に舞い上がる時、「神戸の街の上から」という一言があります。私が皆さんに言いたいことはわかりますね。この絵本の作者は阪神大震災を体験して、何を一番強く思ったかということです。ありふれた1日、本当に平凡な1日にどれだけ価値があったか、どれだけその時間が大事だったかということ、たくさんの人びとが深く思い至ったと思います。当たり前の1日、つまらないトラブルがあつたり、いやなことがあつたり、今日もそういう1日かもしれません。だけど、それを大事にしようねということ子どもたちに伝えてほしいのです。

◇『夜と霧』

皆さんはフランクルの『夜と霧』という本を読んだことがありますか。震災が起きた後、『朝日新聞』の夕刊がこの本を取り上げ、この本にかかわったたくさんの人たち取材して連載していました。

私はこの『夜と霧』という本を社会科で取り上げて、卒業する前の中学3年生の子どもたちに授業をしたことがあります。アウシュビッツの話です。私はアウシュビッツに行つたことがあります。社会科の教員なのでホロコーストの跡を見ておきたかったのです。

授業では、何か視覚に訴えたほうが子どもにはインパクトがあり、興味を引きます。今はコンビニで簡単に拡大カラーコピーがとれます。

私のつくった資料を見てください。アウシュビッツにはこういう写真がいっぱい展示されています。もちろんもう60数年前の話です。それは究極の逆境と言つていいでしょう。強制収容所で殺されたユダヤ人の数は600万人といわれています。人類最大の悲惨な出来

事だったと思います。しかも、これは自然災害ではなくて人間が殺したわけです。ユダヤ人がガス室へ送られていったというのは、皆さんは大学生なので知っていると思いますが、子どもたちはアウシュビッツなんてほとんど知りません。

本当はこういう写真は子どもには見せないほうがいいかもしれません。とくに、小さい子どもには見せるべきではないと思います。平和教育として、皆さんも熱心な先生に、小学校低学年から戦争や原爆のことを教わった人もいるかもしれません。しかし、私は自分の子どもに対して失敗した経験があります。広島に小学校2年生で連れて行つたのです。黙り込んでしまって、表情がおかしくなりました。大人になってから「お父さん、あれはきつかった」と言われました。小さい子に本当に平和教育をしたければ、生きているっていいな、友だちっていいな、うれしいなという体験をいっぱいさせてあげたほうがはるかに平和教育になると思います。戦争の悲惨を知らせるだけが平和教育ではありません。

秋葉原での無差別殺人事件のあの青年を思い浮かべてください。彼に平和の価値が届くのでしょうか。むしろ世界は滅びればいいのか。自分では生きていたのではないのでしょうか。自分の人生を大事に思えない人には平和は無価値なのです。生きているっていいと思えない限り、平和は意味をなしません。だから皆さんが生活指導をやるなかで、おおもとは自分が生きているということ、そして友だちがいるということ、これから生きていこうとすることに対して肯定的な気持ちになれるようにすることは、一番大きな課題です。生活指導をされて生きているのが嫌になったり、自分がいかにだめかということだけを思い知つたら、意味がないわけです。そのことをまず胸に持っていてください。

しかし、中学3年生はもう幼い子どもではありません。これから大人になっていく。そ

して彼らが生きていく時代は厳しいことの多い社会になると思います。そうだとすれば、私は彼らに逆境を生き延びる力を育てたいと思いました。この写真を見て、酷い話だと人間への絶望で終わってしまっただけは何の意味もないでしょう。そこで『夜と霧』を採り上げたのです。これを書いた فرانクル という人は精神科のお医者さんで、本の原題は『ある精神科医の収容所体験』です。収容所ではあらゆるものを取り上げられました。全ての持ち物は没収され、髪の毛さえも刈り取られ、名前まで奪われました。彼らは番号で呼ばれたのです。囚人服を着せられて、男たちはマイナス何十度の世界で強制労働させられ、それができなくなるとガス室に送られました。耐え難い状況です。広い収容所は鉄条網で囲われ、高圧電流が流れています。心身が崩れて早々と病気で死ぬ人や、自分から鉄条網に向かって走る人も少なくなかったそうです。しかし、この死の収容所を生き延びた人たちもいます。彼らには何があったのか、精神科医のフランクルは冷静に観察しました。

それが子どもたちへの問題です。授業をする時にはすぐに答えを教えなくて、問いを立て、子どもたちが皆で考え、探していくことが大切です。そこで全員に問い掛けます。「フランクルは、生き延びた人々には何があったと書いていると思うか、漢字 2 文字で書いてごらん」と。「君は何て書いた？」と聞き、交流するのが面白いのです。皆さんなら、何と書くでしょうか。

いきなり手を挙げた子がいました。私のクラスはお馬鹿が多いのですが、最初の子は元氣よく「しぼう！」と言ったのです。漢字変換できますか。私もできなかつた。大勢のやせこけた写真を見て彼は思ったのです。「脂肪」がないと早く死ぬと（笑）。「しぼうって腹の周りにつくあれかよ」。ただ、子どもの発言を馬鹿にしてはいけません。面白いならいいですが。収容所では水みたいなスープと

わずかなジャガイモのかけらみtainな食事です。つけたくたって脂肪なんかない。体がどんどん自分の肉を食べて衰弱していく。そういう状況なんです。彼は真面目に考えたのです。

2 番目に手を挙げた女の子は何と言ったと思いますか。これもお馬鹿な女の子で、大きな声で「愛人！」と言いました。「愛人かよ、おまえ」（笑）。これも馬鹿にしてはいけません。その子はその子なりに考えて愛人と言ったのです。愛人といえば聞こえは悪いけれども、私が漢字 2 文字でと言ったのが悪かった。「愛する人と言いたいんだよね」。それは当たりです。フランクルは、「愛する人」と書いている。「愛する人を持っている人は、人生から降りられない」と書いている。「愛人」は決して間違いではないどころか、本質を言い当てています。

聞いてみると、男の子が一番多かったのは「根性」と「気合」。気合いと根性で生き延びられれば苦労はしませんが、間違いではないと思います。女の子は「家族」が一番多かったです。それから「恋人」と書いた子も何人かいました。皆、一生懸命考えたのです。

それではフランクルは何と書いたのか。それが「希望」です。逆境を生きるうえで一番大事なものは、希望があるかないかだということです。しかし、ここからが最も難しいところです。それでは希望はどうしたら持てるのか、が問題だからです。そこから教育の本当の大きなテーマが始まるのです。

（2）何が人間にとって大切なものか ——『夜と霧』から

皆さんに生活指導のお話をするのに、ありきたりにやりたくないもので用意したものがありません。（配布したプリント教材を指す）『夜と霧』からの抜粋です。〔 〕にどんな言葉が入るでしょうか、考えてください。

収容所ではちょっとしたことで、毎日、しょっちゅう看守に殴られていました。フランクルはこう書いています。「殴られることの何が苦痛だといって、殴られながら〔①〕ことだった」と。なんだと思いますか。

それはこれからお話しする生活指導にとってのポイントの1つです。殴られること自体、肉体的な苦痛以上に、人間は何が苦痛かということです。この括弧のなかは、元の言葉はドイツ語ですが、日本語に直すと「さげすむ」「あざける」「あなどる」という意味の言葉が入ります。つまり、とことん馬鹿にする。「くそ野郎」とか「ブタ野郎」とか、「おまえなんか生きてる価値はねえよ」という言葉とともに殴る。その耐え難さを彼は指摘しているのです。

皆さんが子どもたちに対応する時に、失敗はあり得ると思います。だけど、子どもが蔑まれたり、侮られたりするということは、人間にとって最も辛いことなのだという事は知ったうえで対応してほしいと思います。褒めても叱ってもいい。しかし、その子の持っている誇りだけは絶対に傷つけてはならない。これが精神科医のフランクルが極限状態で言っていることです。

次です。「人は強制収容所に人間をぶち込んで全てを奪うことはできるが、たった1つ、与えられた環境でいかにふるまうかという、人間として最後の〔②〕だけは奪えない」。

考えてみてください。皆さんが教師になったとしても、あるいは教師にならずに他の仕事に就かれたとしても、大切なことです。命令されて何かをやらされるということはあると思いますが、でも最終的にどうふるまうかはその人の自由なのです。その奪えないものは人間としての心、誇りです。それは生活指導においても、最も大事な前提だと私は思います。

3番目。辛くて生き延びることが困難と思われる日々に、何が人を救うのでしょうか。

「〔③〕に目を向ける時、内面の生は独特の徴しるしを帯びた。心は憧れに乗って〔③〕へと帰って行った。」同じ言葉が2度入ります。さて、どんな言葉でしょうか。

思いがけず、彼が書いているのは「過去」という言葉でした。子どもの言葉にすれば、それは「思い出」でしょう。全てを奪われた後に残ってくるのは頭のなかだけです。頭のなかによい思い出を持っている人は、逆境を乗り越えることができる。そうかもしれません。だからこそ津波の瓦礫のなかから人々はアルバムや思い出の品を必死に探しているのではないのでしょうか。人間とはそういうものです。皆さんに言いたいのは、たった3週間ではあっても、子どもたちに何かいい思い出を、教室のよき思い出を1つでも2つでもいいから子どもたちに残してほしいと思います。それがいつか子どもの人生を励ますこともあり得るということです。

4番目は「〔④〕は自分を見失わないための魂の武器だ」というものです。実はこの言葉を、被災地の避難所になっている体育館の入口に誰かが掲げていたそうです。あの苦難のなかで、『夜と霧』を読んだ人がいたわけですね。「それは、ほんの数秒間でも、周囲から距離を取り、状況に打ちひしがれないために、人間という存在に備わっている何かなのだ。」と続けています。だから彼は毎日義務として最低1つはあるものをつくろうと仲間提案したそうです。あるものとは、…「笑話」です。〔④〕に入る言葉は「ユーモア」なのです。

それも教育実習で生活指導をするうえではとても大事なものです。皆さんも目を吊り上げて生活指導をするのではなくて、どこかで子どものやることを、悪さも含めて、面白がってほしいのです。笑いが心をなごませ、人間的な感情を呼び戻します。「バカだったなあ」と反省を生むかもしれません。そういう指導は子どもたちにはうれしいと思います。

怒られながらも、どこかで目が笑ってくれている先生がとてもうれしいのです。ユーモアにはどこか人間信頼の匂いがあります。悲壮感に満ちて目を吊り上げていては、多分指導としては子どもの心にあまり響かないと思います。

5番目。「私たちは現実には終止符を打たれた人間だったのに、あるいはだからこそ何年ものあいだ目にできなかった〔5〕に魅了されたのだ」。ある日、皆、仕事に疲れ果てて収容所に戻って、しばらくすると誰かが「外に出てみるよ」と声を掛けた。外に出ると、そこに何が見えたか。それは目に沁みる、焼けつくような夕焼け空だった。この括弧のなかは、「自然の美しさ」です。子どもたちは人工的なものに取り囲まれて生活しています。だけど自然の美しさに目を見張るといのは、一番子どもには大事なことです。自然に接する時間が、下手な生活指導より子どもの心を洗うのです。

ついでに詠み人知らずの一句を紹介します。「虹が出て タイム取ってる 草野球」。私が教師をやっている時に好きだった句です。そういう気持ちを持ってほしいと思います。虹を大事にする教師であってほしいのです。授業時間が足りないから、ある單元までいけなかったからって、子どもの人生になんぼのもんじゃと私は思います。そんなものは取り返しがつきません。「虹が出てるよ、先生」と言われたら、皆で窓を見て、「あ、すごいね。きれいだね。楽しいね。」と言えるようにしたいものです。確かに教師というのはプロでやっているわけですが、どこかで遊びの心がないとやっていけません。私は教師の仕事とは、どこかで子どもと遊ぶという仕事だと思うのです。プロ野球にはない草野球の面白さや楽しさを子どもと一緒に味わってほしいのです。

6番目は先に紹介した「希望」です。それはまず「自分を待っている〔6愛する人〕」です。大震災を見ていてもそうですね。恋人や、

家族を持っている人、あるいは自分が責任を持って担当している人たち。愛する人がいれば生きることから降りられない。それが希望というもののものになると思います。

では次の括弧〔7〕は何でしょう。これがこれからの皆さんに大事なことです。「仕事」です。仕事を持っている人は、それが希望なんだと彼は言います。彼は医師で研究者です。だから研究者としての仕事をもっともってやりたい。だから死ぬわけにはいかない。皆さんも教師という仕事、あるいは教師でなくてもいいですから、何か「自分を待っている仕事」を持ってほしいと思います。それが希望に繋がるということを中心に留めておいてください。

最後に、〔8〕。これが一番大事かもしれません。収容所の看守ほとんどが酷い人なんだけれども、現場監督がある日、小さなパンをそっとくれた。私はそれは監督が自分の朝食から取り置いたものだったということを知っていた。あの時私に涙をぼろぼろこぼさせたのは、パンというものに対してではなかった。あの時、この男が私に示した人間らしさにだった。そしてパンを差し出しながら私に掛けた人間らしい〔8〕だった、と書いています。これは皆さんに伝えたい生活指導の一番のポイントです。

何だと思いますか。パンをくれたけれど、フランクはパンがうれしかったのではないんです。何がうれしかったのか。彼の示した人間らしい「言葉」だったのです。言葉って難しいです。私も教師をやっていて、言葉は本当に難しいと思っていました。皆さんもすぐに言葉は出ないかもしれない。言葉は場合によっては逆効果のことだってある。だからこそ、人間的な言葉を選んでほしいと思います。

そして、もう1つ、もっと人を励ます力を持っているものがあります。それが9番です。

考えてみてください。人間らしい何なのか。

それは、「まなざし」です。人間らしい「まなざし」。それは言葉が出なくても、誰にでも可能なことです。君のことを大事に思ってるよという気持ちがあればいいのです。それさえあれば、生活指導がうまくできなくても大丈夫です。何か子どもの心に伝わるからです。そこが教師という仕事のありがたいところです。

絵に描いたようにうまくできたり、時間通りに終わったり、子どもが目に見えて変わったり、そんなことはめったにありません。人間なんてそう簡単には変わらない。生活指導は特にそうです。だけど、教師の何か子どもに残って、いつかその種が萌え出す時があるかもしれない。それが人から掛けられた言葉だったり、まなざしだったりする。それを心に留めて生活指導ができれば、私は十分だと思います。

日本は少年事件が多いと言われていますが、とんでもありません。日本の少年犯罪は少ないんです。国際比較を見てみますと、少年による殺人事件の発生率は、アメリカはやはり多くて10万人当たり7.1人。ドイツでも5.9人、イギリスが2.5人、フランスは少なくとも1.5人。日本はどうでしょう。0.5人です。先進国では最も低いほうだと思います。

私がここで言いたいのは、日本の教師はダメだとか、不適格教員をどうするかとか、日本の教師がいかにダメかということがすごくマスコミで騒がれます。叩かれ続けていると言ってもいいかもしれません。しかし実は日本の教師は、今挙げた国々に比べて、丁寧に丁寧に生活指導しているということです。皆さんのかかわった先生もそうだったと思いますが、日本の先生は授業だけやるという先生ではないでしょう。普通外国では、教師は授業をやって終わりです。社会なら社会の教室に子どもが来て、授業が終わったら「はい、さよなら」で家に帰る。ところが日本の教師は、本当に細かいところまで子どもの面倒を

見ます。子どもに寄り添って丁寧な生活指導をします。子どもの思い出に残る行事も一生懸命つくります。そうやって育った子どもたちは、そうそう酷い犯罪を起こす子どもになっていないんです。だから生活指導というのは意味があるということです。その数字を見てくれれば、全てが日本の教師の努力のせいだとは言いませんが、無関係とは決して言えないでしょう。

もう1つは、学校というものの意義です。少年でも大人と同じように厳罰を与えろと、少年法が改正されました。本当にそれは正しかったのかということです。そのためのデータとして、刑法犯が再び犯罪を起こす率を比較します。刑務所に入っていた大人が出てきた時の再犯率は56%です。それだけ大人は生活のいろいろな大変さもあるんだけど、少年院を出た子どもは再犯率は26%です。大人に比べて約半分です。それは何の違いかわかりますか。

刑務所にはなくて少年院にはあるもの。何だと思いますか。それがまさに生活指導です。少年院は生活指導をしているのです。先生がいるんです。朝は6時に起きて、規律ある生活をする。罪の反省を子どもと一緒に考える。本を読み、作文を書いている。つまり少年院というのは小さな学校なんです。刑務所は違います。ただそこに入っていればいい。ただ入って時間がつぶれる。何年か経ったら出ていく。これだけの話です。つまり生活指導とか学校を見くびらないでほしい。意味があるのだということ、そして人は変わる、成長できるということを疑わないでほしいのです。

(3) 生徒に届く言葉を

皆さんは、いわゆる教育学部に所属しているわけではない。いろいろな職業に就こうと思ったらなれる人がたくさんいるわけです。可能性はたくさんある。教師は選択肢の1つ

でしょう。だから試すということに意味がある。

ただ、最初に言ったように、不熱心に、不真面目に試さないでほしい。できるだけ真剣に、一生懸命試してみる。それだったら誰も文句を言わないです。いい加減に試す人、半身になって適当にやり過ごして3週間終わろうという人は見ればわかります。授業でも、なるべく後ろに座って、適当に聞いて単位だけ取ってやろうという、そうは思っていないかもしれませんが、そういうのはやめたほうがいい。なるべく懸命にやってほしい。

学校からも、教育実習は迷惑だとよく言われますね。確かに迷惑です。私も学校にいた時に、教育実習生が来ると、それなりに手が掛かるし、教員にとってはやらなくてもいい仕事が増える。でもそれはしょうがない。だって自分だってやったもの。偉そうにしている職員室の先生たちも全員教育実習をやったんです。全員迷惑を掛けている。若い人は迷惑を掛ける権利があると思っています。ただし、意味のある迷惑にしてほしい。無意味な迷惑は困る。意味のある失敗とか、意味のある迷惑は、若い人の特権だと思います。だから迷惑を掛けること自体は気にしないでください。そこから皆さんが何かを学ぶことができたかが問題なのです。

もう1つは、教育実習にせっかく行くなら、それなりに何かテーマを持って行ってほしいということです。授業をつくるのもそうだけれども、生活指導もそうです。何がテーマになり得るかということです。人間を洞察するというか、自分を知るということ。よく「自分探し」と言うけど、自分探しなんて、部屋に閉じこもっていてできますか。自分は何者かなんて、部屋に閉じこもったってわかるわけがない。自分が何であるかというのは、他者に映った自分を見ることでわかってくる。特に子どもというのはすごく正直です。中学生に映った自分はどのような人間に見えるか。

あるいは職員室のなかの自分。それによって自分が何に向いていて、何に向いてないか、何ならできて、何ができないかということがわかる。自分を研究するというテーマでもいい。何か持って行ってほしいと思います。

さっき、失敗してもいいと言いました。だって皆さんは失敗するに決まっている。現場の教師だって、何十年もキャリアを積んだところで、失敗は避けられない。人間相手の仕事はそういう難しさがある。前にうまくいったこと、あの子にうまくいったことが次の子にうまくいくとは限らない。全然シチュエーションも違えば、性格や生い立ちも違うので、失敗は避けられない。だけど失敗してもいいんです。そこが教育の不思議なところです。

反面教師という言葉もありますが、教師が失敗しても生徒は、結構学ぶものがある。特に実習生は間違いなくいっぱい失敗すると思う。それは子どもから見たら面白いし、学ぶところがいっぱいあるわけです。だから失敗を恐れない。失敗にも教育的意味があるということです。そこが教師の仕事の面白いところです。他の仕事ならそうはいかない。失敗したらきつく怒られますから。だけど教師だけは違う。失敗に意味がある。ただそのためには一生懸命やっつての失敗でなければならぬ。いい加減にやった失敗からは何も学ぶものはありません。

中学校の3年間は子どもにとってはもろに反抗期、もろに思春期です。だから、かわいげがないです。中学校は憎らしいやつがいっぱいいます。それは覚悟したほうがいい。まず、「限度を超えた自己中」、次に「我慢ができない」、かと思うとすぐ諦めて、「こんなのできねえよ、先生」とすぐ言ってきます。「先生」と言ってくればまだいいよね。私なんか、「ひろし」とか言われて、礼儀も知らない。恥も知らない、恩も知らない。「おまえら、いいかげんにしろよ！」の世界です。

でも、生活指導は教師がキレていては仕事

になりません。子どもに言葉が届かなければ意味がない。多分教育実習生でもそうだと思いますが、教師はなめられてはいけない、という意識が強くあります。子どもになめられたら指導が成り立たない、そう思い込んでいます。でも、なめられないってそんなに大事ですか。私は途中から、もうなめられてもしょうがないどころか、なめられるのが教師の仕事の1つだと思うようになりました。なめられるかどうかよりも大事なのは、言葉が届くかどうかです。ぴしっと言うことを聞いているふりをしていても、実際は何も聞いていないということはよくある。面従腹背、むしろ反発しているケースだってたくさんある。それは指導として成立していない。なめられているように見えながら、その先生の言っていることについて何かを受け取っているのであれば、そのほうが生活指導として意味があると思います。子どもを憎まない、嫌わないことがまず大事です。

ではどうやったら憎まない、嫌わないですむか。私の友だちが教えてくれました。ドラえもんに「ほんやくこんにやく」というのがあるそうですね。いろいろな外国の言葉でもすぐに翻訳してくれる。子どもの言っている言葉も「翻訳」したらどうかというわけです。「死ぬ」と言われたら、「先生、おはよう」ぐらいに翻訳する力があれば腹は立たない。子どもの言葉をそのままには受け止めない。さっきユーモアということが出てきましたね。距離を置く。ストレートにばかり対応しないで、ちょっと距離を置いたり、斜めからほぐしたりしながら、子どもの本当の思いや素顔にアプローチすることが大事だと思います。

もう1つ大事なことは、子どもを研究的に見ること。先ほどの『夜と霧』を書いたフランクルも、自分が生き延びられた理由の1つに、自分の置かれた状況を常に研究的に見ていたことを挙げています。現実がどう見えているかが絶望と希望を分かちつのです。子ども

理解こそが、生活指導の前提です。子どもという存在をどう見ればいいのか、子どもの言動も研究的に見ていけば、いちいち腹が立ったりはしません。皆さんも、教育実習の3週間のあいだには辛いことや苦しいことがあるかもしれませんが、そういう時には、それを研究対象として見る。教育とは何か、自分の対応はどうだったか、そういう研究的な視線を持っていれば、教育実習から学び取れることは多いと思います。

研究的に見る1つのデータを紹介します。出典はユニセフと日本青少年研究所です。

例えば、「自分はだめだ」と思っている日本の中学生はどのくらいいるか。アメリカは15%ですが、日本はなんと55%。半分以上が自分をダメな存在だと考えている。高校になるともっとすごい。自分は価値ある人間だと思うという高校生は、日本は7.5%しかいない。アメリカは57.2%です。自分に満足している生徒が日本は非常に少ない。確かに日本は人を殺す子どもは少ないと言ったけれども、残念ながら自分に満足していたり、自分を肯定的に見たり、自分は価値ある人間だと思っている子どもの数は外国に比べてすごく少ない。

これは何の関係していると思いますか。日本の教育では、生徒はほとんど「させられている」わけです。授業でもほかの指導でも、やらされていることが多い。意味がわからないけど、とにかく何かやらされる。やらされ続けた人間は、自己肯定感が下がってくる。自尊感情が下がってくる。だから皆さんに言いたいのは、たとえうまくいなくても、子どもたちが自分で考えたりやってみたりして、それで失敗したらそこで学べるし、うまくいったら一緒に喜んでくれるし、という体験が結局のところ一番子どもを育てるんです。「いじめ」もそうです。幸福な子どもは人を迫害しません。どこかに不幸を抱え、嫌なことをいっぱい抱えている子が攻撃的に出てくる。

キレたりもする。人をいじめたりもする。だから、一番大事な生活指導は、その子に自信をつけてあげることです。そして、ちょっとでもいいから自分も捨てたものではないな、イケてるなと思えるように、そういう体験というか、まなざしを浴びることができるように。それが一番大きな生活指導だと思います。子どもは最後は自分で育つんです。人に言われて育つわけではない。最後は自分で育っていく。皆さんもそうだったでしょう。自分で育ったんです。ただ、その時に、誰かに支えられる、励まされるということは必要です。それが教師の仕事だと思います。

生徒を憎まないようにと言いましたが、全員を愛するのは難しい。仏様ではないんだから。マリア様ではないんだから。苦手な子や嫌いな子は絶対出てくる。私もそうでした。でも、好きになれなくても、関心を持つことはできる。この子はどんな子だろう、なんでこんなこと言うんだろう。あるいは期待を寄せることはできる。好きになれるかどうかは難しいけれども、期待を寄せたり、関心を寄せたりすることは誰でもできる。子どもの前に立つ時は、そういう思いを持ってほしいと思います。

また、実習を前にして、あるいは教師になるかどうかにあたって、自分は教師に向いてないのではないかと、できないのではないかとという悩み方は誰でもします。私もしました。初めから、俺は教師に向いてるとか、自信満々で行く人はめったにいません。教師になっても、俺は向いてないのではないかということ、私は20代はずっと悩んでいました。でも今は、教師生活を終わってみて、教師に向かない人はいないと思えます。なぜかというと、教室にはまさに弱さを抱えたり、辛さを抱えたりしている、いろいろな子がいっぱいいるからです。だから金八みたいな先生や、元気いっぱいな先生ばかりである必要はない。いろいろな教師が、学校にはいたほうがいい。

そうすれば「俺のことは、あの先生ならわかってくれる」という先生をもつことができる。うまくいかないけど一生懸命やろうとしている実習生である皆さんを見て、勇気づけられる子だっているかもしれない。それから、さっき言ったように、うまくしゃべれなくても、あるいはうまくできなくても、一緒にいてあげたり、まなざしを向けることぐらいは誰でもできます。だから教師に向かない人は本当はいない。精一杯自分の持っている味で、キャラで勝負すればいい。本当はそういうキャラではないのに、「おまえら〜」とやったりすると、子どもは嫌がります。無理してもつまらない。自分の持っているキャラや味で勝負してください。そのほうが子どもには届く。決して無理しないように。

生活指導は子どもを型にはめる仕事ではありません。それに、3週間のあいだで何か変わるかという、きつたいして変わらないと思います。それでも何か火種が残ればいいのです。

(4) “人間っばい” 実習を

ここからは皆さんが実際に学校に行った時に気を付けてほしいことをお話しします。

まず子どもとのふれあいです。挨拶を3つぐらい考えましょう。まず全校生徒に挨拶させられます。職員室で挨拶させられます。それから教室で自己紹介させられます。授業の時にもそうでしょう。だからいくつかのバリエーションで、自分という人間を子どもに紹介する。あまり長々としゃべられたら聞いているほうも迷惑だから、本当にごく短く、自分がどういう人間かということが紹介できるようにしてください。出会いは大事です。自分の名前は どうしてそういう名前なのかでもいいし、小さな頃の自分のエピソードでもいい。自分は どういうことが好きで、どういうことが嫌いかは最も端的にその人を表します。

例えば「人の揚げ足を取ったりするのはすごく嫌いです」とか、何でもいい。単なる抽象的な言葉ではなくて、何か印象的な、皆さんという人間がわかることを話して、自分を聞いてください。

それから教育というのは「関係」です。子どもたちといかに関係をつくるか。関係ができてこそ言葉が通じるわけです。皆さんは好きでもない相手、嫌だと思っている人の言うことを聞きたいと思いませんか。思わないでしょう。どこか好意を持った相手の言うことなら聞くわけです。だから好意を持ち合う関係が望ましい。だから教育は恋愛と似ている。恋愛というのは、本当のその人よりもちょっとよく見ている。よく見られた相手は、期待に応えようとする。経験があると思いますが、恋愛というのは向上心を刺激するフェロモンみたいな力を持っている。この人にもっとふさわしい人になろうとか、そういう気持ちで湧く。だから子どもを見る時も、本当のその子よりちょっとよく見てあげる。君はもっとこういう子じゃないの、という雰囲気で見えてあげる。逆は悲惨だからね。本当のその子より低く低く見られたらどうですか。「じゃあいいよ」という気持ちになるでしょう。子どもとの関係のつくり方を工夫してみてください。

もう1つは、恋愛もそうですが、関係をつくるには皆さん自身がまず自分を開くということです。子どもよりも先に皆さんのほうから自分を開いてあげてください。自分のなかの弱さはむしろ出したほうが関係はつくりやすいと思います。私はいつも、自分が小学校1年生の時に遠足でうんちを漏らした話とか、中学生の時赤面恐怖症だったとか、いろいろな失敗談を話していました。「へえーっ、先生ってそうなんだ」と親しみをもち。自慢話だったらどうですか。すごく勉強ができて、スポーツ万能だなんて言われても、なんか嫌味で距離を取りたくなりますよね。だからむしろ自分の恥ずかしさや失敗談を語ってあげる

と、子どもと距離が縮まると思う。それで、何かそこから繋がってくる道があると思います。

さて、学校での1日の流れです。朝、大抵の中学校は校門で「おはようございます」とかやってるでしょう。一生懸命やってください。ただ、生活指導というと髪型とか服装ばかり見る。変なものを着ていないかとか。それって朝から嫌ですね。皆さんは少なくとも子どもの顔を見る。今日はどうな顔をして来ているか。持ち物や服装よりも大事なのは子どもの表情です。元気かな。大丈夫かな。どんな気持ちで来てるかなというのをできるだけ見てあげて、声を掛けてあげてほしい。

朝の打ち合わせ。職員室で打ち合わせが行われますが、それを子どもに伝えなければいけない。多分最初はわからないことだらけだと思う。その時は、まず聞くことが大事です。わけもわからず子どもに伝えても、わかるわけない。さっき出たこれは何ですかと、遠慮なく聞いてみる。その聞いたことを自分なりに、わかりやすく子どもに伝える。つまり伝えるというのは、その人からやる気を引き出すということを伴わないと、ただの伝達でしょう。学校で行われる伝達というのは、それを伝えることによって子どもに何か行動を促すわけですから、やる気にしていってほしい。教育の仕事は事務的にやらないこと。小さなことにも、ちょっとハートを込める。それが教師です。

それから学校では、休み時間や給食などで、できるだけ子どもと話してください。話を聞いてくれる、話し掛けてくれる、関心を寄せてくれるというのが、子どもにとって一番うれしい。だから、たくさん話し掛けてあげてください。話を聞いてあげてください。

1日の終わりは帰りの会。帰りの会もいろいろな伝達をしなければいけないけれども、注目するのは、お馬鹿連中です。利口なやつはいい。教室に必ずお馬鹿な一群がいますか

ら、お馬鹿どもに、「わかったか、おまえ」とか「もう1回言ってみろ」とか、とにかく皆がわかるように、そしてお馬鹿がちゃんとドジを踏まないですむように手助けをしてあげるといことを考えながらやっていってください。

お掃除や給食の時は、一緒に働いてください。一緒に働くというだけでいいんです。一緒に働いているうちに光るものがあるんです。この子はこういうところがすごいな。ここはだめだなとかいうことがある。短いアドバイスと、よくやってくれたねという気持ちがあればいいと思います。

部活もいいですね。自分の得意な分野で交流できれば子どももきっと喜ぶでしょう。それから教室では見せない姿を部活動で見られる。自分が得意でなくても、いろいろな部活動を見てあげてください。子どもの活躍する場面を見てあげることが一番です。

学級の仕事は集団の行動と1人ひとりの成長を結合させる仕事ですが、リーダーと問題を抱えた子と両方注目しなければいけない。リーダーにはどうかかわるか。任せるといことは一番人が育つ条件、だからリーダーには任せる。普通の子は自分のことしか考えてない。リーダーは全体を考えます。だからリーダーを育てようと思ったら、全体を見させる。「おまえ、このクラスどう思う?」「あいつのことどう思う?」。つまり問題を投げ掛けられて全体を見るように仕向ける。そのことによってリーダーが育っていく。次に先取り。普通の子は目先しか見ない。リーダーはもっと先を見ないといけない。だから全体を見ることと、先を見ることを子どもと一緒に考えてください。それでリーダーは育ちます。こうやったらいいというアドバイスができれば、もっといいでしょう。

問題を持っている子はどうするか。説教しても人間はあまり変わりません。まずは聞くことです。「なんでおまえあんなことした

の?」。それから問題を持っている子は、どこか自分を否定的に見ていることが多い。そこで、その子の肯定面、光る場面を絶対見つけてあげること。つまりその子に自己肯定感を取り戻してあげることが、問題を持っている子を立ち直らせる一番大きな力になる。そして聞いてあげることです。聞いてあげるといのは、関心を寄せているということですから。

生活指導というのは、シャツが出てるとか、靴がどうのとか、細かいことが多いけれども、そういうことについては抜けているほうが子どもにはありがたい。特に実習生は。大雑把でいいじゃないですか。私はそう思っています。一応注意はするけれども、そう簡単には変わらないし、子どもはそれなりに格好つけてるわけだから、どこかで大らかに大目に見る。そういう教育実習生であってほしいと思います。

どういう注意を子どもは嫌がるか。些細なことを大げさに、つまらないことにこだわって本質を見ない、周りがどう見るかばかり気にして自分の気持ちを見てくれない、そういう注意は嫌でしょう。生活指導にはマニュアルはないと思ったほうがいい。その場、その時の自分の直感です。その直感は何を基準にすればいいか。1つは子どもだった自分です。子どもだった自分ならこんなこと言われたくないな。こんなの嫌だなという感覚を大事にしてほしいと思います。子どもは誰でも愛されたいと思っているし、誇りを持っているし、成長したいと願っている。それさえわかっているら、あとは臨機応変です。自分の人間的な反応で対応すれば、取り返しのつかない失敗はしないと思います。実習生はそれでいいと思います。

それから運動会などの行事では、勝つことだけを要求しないように。もちろん勝つてほしいし、応援するんだけど、負けた時にも感動できるかどうかということを考える。

負けたら全部おしまいというのでは悲しすぎます。行事には意味があります。プロセスとか、子ども同士の関係とか、いろいろなところにいっぱい散りばめられた素敵なものを見られるところです。子どもはそういう友情や連帯、感動が大好きですから。

私が最低だと思うのは、人の不幸を喜び合うような教室です。だから一番教室で皆さんに考えてほしいのは、教室という空間、学校という場所を安心できる場所にしてほしい。誰かの辛さは一緒に悲しむ。誰かが喜べば一緒に喜ぶ。それだけでいい。あとは何もなくてもいいと思う。そういう教室を目指してほしいと願います。

最後に、『HERO』というキムタクが主演した番組のセリフで終わります。観ていましたか？ キムタクは久利生某という検事ですが、裁判で1回だけ負けるんです。その時の助手みたいな役割の松たか子の言葉がすごく印象に残っています。結婚詐欺の女が頭がよくて、裁判で負けてしまう。だけど松たか子は落ち込んでいるキムタクに言ってあげるんです。「久利生さんのほうが人間っぽかったです」って。

世の中には勝ち負けを超える価値があります。皆さんにとって、上手にやれるかどうかというよりも、どれだけ人間っぽく教育実習ができたかということを最大の目標にしてください。一生懸命試してくださいね。皆さんが一生懸命やった結果、この仕事はどこか面白いところがあるなと思ったら、ぜひ教師になってください。皆さんの今後の活躍に期待します。では終わります。